
ワークショップ 2

在宅医療における泌尿器科医の役割

座 長 古 川 順 也 (徳島大学大学院 医歯薬学研究部泌尿器科学分野)
小 林 知 子 (岡山大学病院)

司会のことば

2025年には、日本の75歳以上の人口が4人に1人に達すると予測されており、医療および介護サービスの需要は一層の増加が見込まれている。このような背景を受け、包括的なケアシステムの構築と在宅医療の充実が喫緊の課題となっており、国・厚生労働省はその実現に向けた施策を積極的に推進している。

在宅医療では、多職種が連携して質の高いケアを提供することが求められる。その中で泌尿器科医は、排泄ケアという高齢者の生活の質を左右する重要な分野を担う専門職として期待されている。

本ワークショップは、野口満大会長の呼びかけにより「在宅医療における泌尿器科医の役割」をテーマに、多職種連携の場として企画された。初めに、救急専門医の資格を持ち、在宅専門クリニックを開院されている野島洋樹先生に、在宅医療の理念、現状と展望について総括いただいた。スタッフ間や地域病院の勤務医との情報共有がスムーズに行えるよう、デジタル機器を駆使して工夫をされていることが印象的であった。続いて、国立長寿医療センターの西井久枝先生には、高齢者の排尿機能と在宅医療における課題についてお話いただいた。排尿機能の低下は、日常生活動作や認知機能の低下と関連し

ており、排尿障害への早期介入が高齢者の健康維持に重要というメッセージが、多くの聴衆に伝わったことと思う。さらに、コメディカルの視点から、泌尿器科病棟や外来での豊富な臨床経験を持ち、訪問看護・介護ステーションを運営されている今丸満美先生に、現場での排泄ケアの実践についてご講演いただいた。患者や家族の訴えを丁寧に聞き取り、排尿障害の存在を疑って主治医に泌尿器科医への相談を提案するくだりは、さすが元ウロナースと思わせた。最後に、緩和ケア認定看護師である染矢麻衣子先生には、在宅でのがん患者のケアおよび泌尿器関連の問題を、具体例と共にお話いただいた。特に Advanced care planning (ACP) に関しての現場発の言葉の重さは胸に迫った。

在宅医療とひとことに言っても、患者ごとに疾患や病状が異なり、それによって泌尿器科医への期待も変わってくる。また、泌尿器科単科開業医と総合病院の泌尿器科医では、提供できる診療内容も異なる。しかし、どの場合においても重要なのは、患者や家族のニーズを正しく把握し、それを医療／ケアチーム全員が共有することではなかろうか。本ワークショップに参加された西日本泌尿器科学会員の皆様が、在宅医療における多職種連携の現状について理解を深め、これまで以上に貢献して下さることを願っている。